

私と天文学 [IV]

これぞ満天の星

鈴木健二 (NHKアナウンサー)

私の家は江戸時代の元禄の中頃から、隅田川の東や西に住んでいました。私も下町で生まれました。しかし、そこは隣りの家と軒と軒が接していて、夜空に星を仰ぐわけにはいきませんでした。星を見るためには、夜風に吹かれながら、隅田川の岸に立つ以外にはありませんでした。ところが、私の生れ育ったのは本所(現在の墨田区)でしたから、対岸に花柳界の柳橋の灯が艶めかしく川面に映り、その上に、数えられるほどの星がびかびかと光っているという風景でした。昔から芝居や挿し絵に使われるものとそっくりで、星はあくまでも文学的な色どりに過ぎませんでした。そのまま私は45年の歳月を過ごしました。星についての知識は、数学に少し関心がありましたので、航海術の本を読んだ時に、測量の手助けになるのだなという程度のものしかなく、実際には夜空を眺めても、北極星と北斗七星しかわかりませんでした。

しかし、今になって振り返ってみますと、私が星について無知であったから、あの瞬間の感動が素直に自身の心の中に起ったのであろうと思います。

昭和47年夏、私は長いインドでの取材を漸く終え、あとはガンジー首相との単独会見を残すだけとなり、あの暑さの中で数か月も走り廻って疲れ切った体を休ませるために、南インドの高地にあるかつての植民地時代に、イギリス人が造った保養地へ向いました。着いたホテルは平屋建ての蕭洒な山小屋風で、庭で芝生に座って本を読んでいると、まるでスイスあたりにもいるようでした。

標高が2000米ぐらいありましたので、夏の終りではありましたが、夕方になると、サリーを着たおばさんが部屋に入ってきて、マントルピースに薪をくべて、フウフウと口で息を吹きつけて、火を燃やしてくれました。

夜、私は書いていたレポートの手を休め、気分を変えようと思って、ドアを開け、ベランダに出ようとしまし

た。

その瞬間、空を見上げた私は、無意識にあーっという叫び声を上げ、あまりの恐ろしさにばたんとドアを閉めて、部屋の中に逃げこんでしまいました。胸がドキドキし、肩で息をするほどの圧迫感がありました。

私は再び恐る恐るそーっとドアを開けました。そこに見たのは、満天の星でした。空全体をびっしりと埋めた星が、指で一つ一つつまめるくらいの高さで、びかびかに光っていたのです。こんなにたくさん星が空にあったのでしょうか。宇宙というのは物凄いのだ、それ以外に言葉がありませんでした。私はベランダに立ちつくして、朝まで眺めました。星の光で本を読んだただ一回のめぐりあいの夜を持つことが出来ました。それは私の人生にとって、忘れることの絶対に無い印象を深く刻み込んだ輝かしい日でした。

あれ以来、私は天文学の本を容易に理解出来るようになりました。望遠鏡ではなく、自分の眼で確かに星を見た強さが支えなのです。

◇ 4月の天文暦 ◇

日	時	記	事
1	21	朔	
2	23	海王星	留
3	12	水星	東方最大離角
4	23	清明	(太陽黄経 15°)
5	12	火星	留
9	14	上弦	
12	9	水星	留
14	15	月	最近
16	4	望	
20	7	穀雨	(太陽黄経 30°)
21	1	冥王星	衝
22	14	水星	内合
23	9	下弦	
26	16	月	最遠
30	5	木星	留

◇ 4月の日月惑星運行図 ◇

